福島南 Rotary クラブ　奉仕しよう みんなの人生を豊かにするために

第 27 回例会　2022.6.15（水）

■出席率　会員６９名中４８名出席６９．５７％　修正５０名　７２．４６％
　　メイクアップ２名

◆会長挨拶　一條 浩孝　会長

先週の水曜日、次年度の第一回理事会が開催されました。いよいよ次年度がスタートしたことになります。渡邊正義次年度会長の思いが垣間見えましたが、その思いを実現するために、皆さんで支えていっていただければと思っております。この理事会で決議されましたことにつきましては、次年度の渡邊会長から直接ご説明されると思いますが、ここで１点だけ皆様にご報告させていただきたいことがございます。次年度の名誉会員選出についてのご報告になります。

宍戸英男さんはこれまで同様引き続き名誉会員に選出され、そして新たに齋藤浩さんが名誉会員として選出されました。齋藤浩さんは福島南ロータリークラブの運営はもとより、福島２１ロータリークラブ創設時の特別代表としても大変ご尽力いただきました。先般ご本人にもこの旨をお伝えし、ご承諾いただいております。クラブを退会後も名誉会員として私たちを見守っていただけるということは大変ありがたいことだと思っております。

さて、皆様のお手元にも資料があるかと思いますが、当クラブ細則にありました指名準備委員会内規を今年度の理事会におきまして指名委員会内規として改正が承認されましたので、その概略につきましてご説明をさせていただきます。

骨子としましては、委員の構成を会長と会長エレクト、そして直前会長を含む直近５代までのパスト会長として組織の縮小を図りました。次々年度幹事指名の際にはこれに会長ノミニーが加わります。そして最も大きな変更点は委員会の役割についてとなります。これ

までは会長・会長エレクトおよび会長ノミニーから提案のあった候補者についてその適否を審議するというものから、委員会が事前の選考段階から関与し委員会として指名を行うものとなりました。このことから委員会の名称も指名準備委員会から指名委員会へと変更することになりました。

この規約変更につきましては未来計画委員会が原案を作り、パスト会長会でもご説明させていただきご意見を頂戴したうえで、最終的に理事会で審議いただき承認されたものになります。次年度からの適用になりますので、よくご確認いただければと思います。よろしくお願いいたします。

本日の例会は３名の皆さんの会員スピーチがございます。今年度は３３名の皆さんにスピーチしていただくことを目標としてまいりましたが、今日をもってその目標が達成できることとなりました。本年度最後の会員スピーチとなります。まず、弓田智之会員によります『地方銀行のこれからについて』、笠 雅樹会員によります『財団委員長を一年通して』、そしていよいよ今年度を締めくる大トリ・フィナーレは、松﨑弘昭直前会長によります『会長年度を終えて』となっております。今日は残念ながら時間がございませんのでお一人お一人へのコメントはございませんが、しっかりとお聞かせいただきたいと思っております。

最後に、次週は本当に久しぶりの全会員を対象としたお酒を伴う懇親会が予定されております。プログラム名としては新旧役員歓送迎会ですが親睦委員会の斎藤委員長の意向で新会員歓迎会の意味も持たせたいとのことです。よくなってきたとは言えコロナが完全に終息したわけではございませんので、特別なことは出来ませんが皆さんで注意を払いながら共に楽しみたいと思っております。

◆会員スピーチ１　弓田智之会員
「地方銀行のこれからについて」

本日は貴重なお時間を頂きありがとうございます。南福島支店に配属となって３年、同じく福島南ロータリークラブに入会して３年が経過しようとしています。南福島支店長の任期は過去３０年近く２年となっておりましたが、ご縁を頂きまして本日に至っております。

この３年間の振り返りますと、コロナよる生活様式の変更はもちろんですが、私が属する地方銀行業界、そして東邦銀行にとって大きな変容が求められた期間でもありました。特に、相次ぐ店舗統廃合、そして両替や入出金時に伴う何でもかんでも手数料を頂戴します、といった具合に、銀行の都合でお客様の利便性に反するような施策が進められてきました。

では何故こうなってしまったのか、東邦銀行だけではありません地方銀行業界を取り巻く環境とこれからの地方銀行はどういった形で存在意義を見出していけばいいのか私なりの考えをこの場をお借りしてお話したいと存じます。

先ず、地方銀行の歴史についてですが、明治時代に「国立銀行」として多くの銀行が誕生しました。国の機関という意味ではなく、国の法によって立てられた、という意味です。当時の銀行は、設立順に番号で名前がつけられました。番号名から改称した銀行がほとんどですが、「地方銀行」の多くは、国立銀行を起源としています。中には現在も番号名を使い続けている銀行もあります。福島近県ですと最近経営統合した新潟県の第四銀行、宮城県の七十七銀行です。

東邦銀行は、昭和 16 年 11 月に３つの銀行の合併により誕生しました。その３つの銀行は、会津銀行、郡山商業銀行、白河瀬谷銀行の３行です。最も古い創業の会津銀行からすれば、今年は創業 126 年目、合併してから東邦銀行となってからは 81 年目ということになります。

では、なぜ 81 年前に合併したのかといいますと、昭和初期、全国的に金融恐慌の嵐が吹き荒れましたが、福島県内においても 30 を超える地元銀行が相次いで破綻し、辛うじて生き残ることができた地元銀行は 11 行（うち普通銀行は９行）のみとなりました。

時を同じくして、政府は、戦時統制経済の一環として、“1 県 1 行”主義の名のもとに銀行合同を強力に推進していきました。当局は、福島県内においては残存銀行のうち経営がしっかりしていた郡山商業銀行、会津銀行、白河瀬谷銀行の３行を県内銀行合同の中核体とするため、昭和 15 年、３行に対し合併勧奨を行いました。このような“国策”によ

って、昭和 16 年に、3 行の対等合併により「東邦銀行」は創立されました。

そして今、地方銀行の既存ビジネスモデルの持続可能性に対する懸念が徐々に高まっています。この背景の１つには、超が付くほどの「低金利環境」が長期化していること、地域の人口減少や高齢化、企業数の減少に伴う資金需要の鈍化により、多くの地方銀行において本業の収益力が低迷していることがあります。さらに、FinTech に象徴される技術革新の急速な進展や、金融業への異業種企業の参入といった経済・社会構造の変化に伴い、地方銀行を取り巻く環境が今後さらに混迷を深めていくと予想されます。

これらの背景の中でも特に超低金利環境は大きく影響しております。日本銀行は、物価上昇率を２％まで引き上げる目標をかかげ、２０１６年１月からマイナス金利政策を導入、10 年物の長期金利までマイナス金利にする金融緩和策を続けています。皆様もご存じの通り、銀行の基本的なビジネスモデル・つまり本業は、低い短期金利で預金者から集めた資金を、より高い金利で企業などに長期で融資することで利ザヤをとって利益を上げています。融資額と利鞘の掛け算で生み出される 資金利益が銀行の利益の大部分を占めてきた経緯があります。このため、長期の金利までもが極端に低くなると、利ザヤが稼げなくなってしまうのです。

次に構造的な要因として、オーバーバンキング、銀行の数が多すぎると指摘される問題が挙げられます。地方では人口減少に伴って企業の数も減り、地域の各銀行は、競い合うように貸出金利を引き下げてお金を借りてもらおうとします。勢い収益力が下がってしまうのです。こうした中、菅前総理大臣の「再編もひとつの選択肢」という発言が注目を集めました。同じ地域の地方銀行同士が経営統合することで、重複する支店を減らしたり、決済システムの統合を通じてコストを削減し利益を確保できる体質に変えていこう、あるいは、県をまたいだ再編により規模を拡大し経営体力を高めることで地域経済の活性化につなげる役割を担えるようにするといった具合です。2021 年 11 月からは経営統合によって地域でのシェアが高くなっても、一定の条件を満たせば独占禁止法の適用を例外的に除外する法律が施行され、経営統合を後押します。福島近隣ですと、新潟県の第四銀行と北越銀行、青森県の青森銀行とみちのく銀行が同一県内地方銀行同士の経営統合、茨城県の常陽銀行と栃木県の足利銀行の経営統合が広域型といえます。

もう一つ、銀行法との兼ね合いが挙げられます。預金を扱う銀行は、政府・中央銀行による許認可が求められます。預金を通じて経済インフラを担っているから当然ともいえます。更には、許認可や監督の大本になっている銀行法により「株式会社」であることを求められています。つまりは銀行法が求める「株式会社」であることの義務により、絶えず株主と地元の間でジレンマを抱えることになります。例えば、収入が減る中で非効率店舗の閉鎖は、利益確保と株主への還元を考える上では有効な手段です。しかし、地元のお客様の利便性を阻害することに疑いの余地はありません。苦しい収益環境、フィンティックへのチャレンジ、そして利害の対立と地方銀行の悩みは尽きることはありません。

そして、これからの地方銀行についてです。これまで地域に支えられ、地域のためにな

るよう努力してきた地方銀行業界ですが、地方経済の縮小がささやかれている今、地域金融機関への期待が大きく、そして高い次元へと進化しています。地方銀行が果たすべき役割がどんどん広がっているということです。首都圏を除く地方圏の殆どは、人口減少や働く人材の不足、コロナ禍等による廃業の増加、そしてこれらに起因したマーケットの縮小等、厳しい環境下にあると言わざるを得ません。また、相次ぐ自然災害や気候変動への対応等、多くの社会問題への対応も迫られています。こうした数多くの社会的な課題を解決するためには、その一つの主体として地方銀行に更なる役割発揮が求められている、それが出来ないのであれば、おそらくは市場から地域から退場を余儀なくされるのではないかと考えます。

銀行はこれまで、３つの業務、お客様の信用を得て預金を集める、ご融資をする、あるいは資金を送る受け取る、いわゆる資金仲介機能を中心に、経済のインフラとしての役割を果たしてきました。当然、この機能の必要性が変わるものではありませんが、これからは地域経済そのものに深く関わっていく仕事の割合が更に高くなっていくことになると考えます。今、国による規制緩和が進められ、地方銀行には「商社業務」「人材紹介業務」「ＩＴ化支援業務」等様々な業務が解禁されているのはこういった背景があるからです。

私はただいま 48 歳、諸先輩方からすればまだまだ若造の分際でございますが、銀行員としてはもう残り 10 年を切っています。この限られた時間の中で、銀行員という職業を通じて出来る社会貢献とは何か。自らの経営基盤の強化をはかるだけでなく、地元に密着した金融機関の一員として、地域の産業が時代の変化に対応できるようお手伝いをしていく。そして地域経済の活性化につなげていく。そうした地域の未来を創っていくことに、微力ながらも邁進していきたいと考えています。

以上ご清聴ありがとうございました。

◆会員スピーチ２　笠雅樹会員
「財団委員長を１年通して」

思いをスピーチしたいと思います。笠雅樹です。私は昭和 45 年生まれ 52 歳になりました。南ロータリークラブに入会は平成 23 年 1 月入会です。大震災の年で、ロータリーの意味、役割も分からず時間だけが過ぎて言った記憶があります。11 年たち、現在財団委員会を仰せつかり想いを少し話したいと思います。

少し仕事の話をします。私は大栄コールドチェーンという会社をしております。

建設管工事業ですが、空調機器、冷蔵庫、冷凍庫の設備がメインです。会社名である、　コールドチェーンとは物流です。生産者からお客様(ユーザー)までという意味です。日本の冷凍冷蔵技術は優れています。鮮度がいいものを流通させる技術があります。その設備をする会社です。

震災やコロナ過で変化がありました。スーパーマーケットで生鮮食品、野菜、魚、お肉日配品全ての商品が高くなったと思いませんか？生産量が減ったため、消費量が減ったため、原材料が上がったため？いろいろな要因がございますが、人件費の高騰と人材不足輸入品の高騰などが主な要因だと思います。

仕事柄、農家さん、漁師さん、食品加工所に伺うことが多々あります。昨年のクリスマス近辺に、お花の生産者のお客様に呼ばれました。ハウスの中には、もうクリスマスというのに、シクラメンの花がたくさんありました。花が咲いてしまい出荷できないものです。出荷が追い付かない。

こんなにたくさんあるのに何でと聞くと、取っても箱詰め梱包してくれる人がいないそうです。年配のご夫婦が睡眠時間を削って作業してるが、全然追い付かないそうです。

魚の加工工場も同じです。

お肉の加工工場も同じです。

海外からの研修生や　就労ビザでの外国人が全然入ってこないそうです。

震災時も同じことがありました宮城県石巻の魚の加工所には中国、インドネシア、フィリピンの研修生が沢山いました。

原発事故があり働いていた外国の方が戻ってこないそうです。

令和 3 年 6 月末で在留外国人は日本に何名居るかご存じですか？　2,823,565 人です大分少なくなりました。

ちなみに福島県の人口が 1,796,497 人です。

新卒・中途の求人募集をしても少子化で若い人は入ってこないしパートも入ってこな

い。就労人口が足らない、だと思います。
建設の現場でも一緒です。若い世代が入ってこない入ってもすぐ辞めてしまう。
皆さんの会社は平均年齢いくつですか？
僕たち建設業は平均年齢 50 歳前後だと思います。
若い世代の働き手が減っています。様々な分野で IT 化など言われておりますが現場作業職人としての作業はまだまだ人手の作業です。
私、昨年会津の塩川にあるテクノカレッジに電気配管課の講師として参加しました。
2 年間専門職の勉強をするのですが電気配管課の生徒が 1 学年 20 名居ません。
その中で、配管の仕事に就くものが 5 名も居ません。
働く若い世代がいないのです。
逆に海外の研修生就労者を雇用して成功している会社もあります。
宮城県にある会社ですが社員の半数が海外の方です。ほぼ女性です
そこの会社は海外のスタッフの為に 3 階建ての寮を建て一人ひとり生活するスペースがあります。雇用形態も日本人と一緒初めは研修生で来日しますが研修終了後就労ビザまた永在資格を取りまた戻ってくるそうです。
1 年間で 5000 坪の工場を 2 棟増設するくらいの優良企業です。
働く人には全然困ってないそうです。
財団委員長を仰せつかり海外とのつながりが持てることを知りました。
働く場所がなく貧しい人々に学業・職業訓練・インフラ等の奉仕をし、その人たちが日本を好きと言ってくれてゆくゆくは自分たちの仲間になってくれればいいと思っています。
もっともっと、海外とのつながりがあればいいと考えております。
自分は昭和の世代ですが今会社に入ってくる子は脱ゆとり世代 Z 世代と言われています。時代の流れについていくのは大変ですが自分もロータリークラブも今の時代にマッチングした事業が出来ればいいと考えております。
来年度は当クラブで初めてグローバル補助金の申請をする予定です。
これから福島南ロータリークラブに入って来る方や若い世代に向けてきちんと実績を残し国際的な奉仕も出来るよう頑張りたいと思います。簡単ですが以上です。

◆会員スピーチ３　松﨑弘昭会員
「会長年度を終えて」

昨年の今頃は、もうすぐ会長年度が終わりだと思っていたと思ったら、早いもので私の次の一條年度も後２週間余りで終わりということになりました。一年というのは本当に早く、時の流れの速さに驚かされてしまいます。

5年前の幹事になる時もそうだったのですが、昨年の会長の時も、本当にいろいろと忙しくて、この大役を全うできるのだろうかと思っていましたが、終わってみると何とかなるものだとつくづく感じました。そして、それは自分がやり通したということではなくて、多くの皆さんの後ろ盾というか、その時々の温かい激励の言葉にも支えられ、多大なるご協力があったからからこそ出来たことだと思っています。

人間というのは、あれもこれもと物理的に身体を動かす時間には制約がありますが、いくら忙しくても頭の中は心の持ち方次第で如何様にでもなるようです。つまり、真剣に取り組むことで誰かが助けてくれるし、悩み尽くして工夫することで解決策が見つかり、意外に何とかなるようです。要は、如何に覚悟を決めるかと言ったところかも知れません。

何れにしても、この貴重な経験をさせて頂いた会員の皆様に改めて感謝とお礼を申し上げたいと思います。

ロータリーでは、良く新しい年度を迎えると、渡邊・宍戸丸の船出というように喩えられることが多いようです。その喩えで言えば、昨年の7月に阿武隈川の鳥谷野の船着き場を出港し、河口から太平洋に出てロータリーの世界を航行してきた一條・赤間丸も既に河口から難所の梁川の猿跳を通過して丁度今頃は、鎌田大橋あたりまで戻ってきたところではないかと思います。

一方、渡邊・宍戸丸は、鳥谷野の川岸で万端の出航準備を終え、その船着き場は、沢山のロータリアンが集まりだして少し賑やかになり始めているようです。

お疲れ様の一條会長と赤間幹事、覚悟を決めて船出を待っている渡邊会長エレクトと宍戸隆司次年度幹事の名前を入れて愚作の歌を作ってみましたので紹介します。

「この一年　赤丸(間る)三つの　上(條)出来で
渡しの岸辺(邊)に　期待も高し(隆司)」

さて、昨年は、クラブ創立50周年ということで、皆さんのご協力のお蔭で、様々な奉仕

活動を実施し、記念誌、そして「バッチは見ている」という小冊子を作成することができました。

この小冊子は、当初、ロータリーに関する一日一言と川柳を作ることで企画しましたが、多くの方の助言により、元会員の佐藤佶さんが残してくれた幾つもの冊子の再編集と会員の皆さんから寄稿して頂いたものを纏め、グレードアップして完成させることが出来ました。そして、冊子を編集する中で、佐藤佶さんのロータリーに対する思いというか、「ロータリーは形ではなく心なのだ」という、真のロータリアンのあるべき姿を勉強させて頂きました。

私もクラブに入会して 19 年近くなりますが、どれだけ身に付いたかは別として、これまでで一番勉強した一年でした。

ロータリーはその目的に意義ある事業の基礎として「奉仕の理念」、つまり、他者を思いやることを奨励し、それを育むことにある。とされています。

そのことは、佐藤佶さんが形を超えたロータリーの精神ということで残した言葉の中に、一人ひとりが他人の立場になってものを考え、他人の役に立つ行動をする。つまり、使う身になって物を作り、買う身になって物を売る。受ける身になってサービスをする。即ち、自分のことばかり考えず、相手の身になって職業に励むということで分かり易く説明されています。

このように説明されると「奉仕の理念」も比較的簡単で、それぞれのロータリアンが既に実践しているではないかと考える方も多いかも知れません。しかし、この「奉仕の理念」というのは中々奥が深くて、会員歴の長いロータリアンでも、理論と実践とでは大きな乖離があるのが現状ではないでしょうか。

私も来月からは、直前会長からパスト会長と呼ばれるようになります。新会員の方には少し分かりにくいかも知れませんが、ロータリーでは特にパスト会長が権威を持った偉い人ということではありません。言ってみれば、クラブ会長を経験した唯の会員というだけの話です。

そのようなことから、ロータリーの形を学ぶには、多くの書物を読み、そして、長く在籍している先輩ロータリアンや会長経験者を先生として学ぶのが良いだろうと思いますが、ロータリーの心というか「奉仕の理念」を学ぶには、先輩会員も新会員もありません。全ての会員が先生であり、生徒なのだろうと思っています。

さて、スピーチの時間が迫ってまいりました。今年度は、会員スピーチに特化した例会ということで、皆さんの貴重な経験談を聞かせて頂きました。私は、大きな山も、深い谷も無い平凡な人生で、お話しできるような素晴らしい経験談は持っていませんが、次の機会があれば、別の角度からまた違ったお話しをさせて頂きたいと思います。

それまで、自分の心に雑草が繁茂しないように、毎日、コツコツと手入れをして磨き続けて行きたいと思います。

◆次回例会　第２８回　2022.6.22

・新旧委員会歓送迎会（夜間例会）